成形圖說

五穀部

十九

共枡本

特別
二
144
18

門加1
號144
卷1918

成形圖說卷之十九

目錄

粟
黍
蜀黍
玉蜀黍

成形圖說卷之十九

五穀部 粟類

阿波 古事記

阿波乃宇留志禰 本艸和名粟米伐粟注ス粱之莖白者按ス是等即平常の粟ミして俗云ふ阿波ゆ

小粟 大和本艸

粟 別錄○粟の古文七字並ス字典ヨ載ス引食經粱米一名芑粟一名稽米○本艸時珍云周禮九穀○韻會小補粟爲陸種之首米之有甲者六穀之名有粱無粟可知矣自漢以後始以大而毛長者爲粱細而毛短者爲粟今則通呼爲粟而粱之名隱矣是西土のいふ〳〵阿波と粱といひ後ヨ粟と呼ひ爲是也毛の長短ヨ付用さはつし漢以前ヨ粟てふ者ハ穀實乃惣稱耳故ヨ論孟等の粟てふ者ヒ今の阿波ことるけ所らそ江談抄ヨと近世以粟爲粱とあれハ吾邦のむち〳〵と粟ヒとこ乃あ〳〵し阿波ヨハ粱の字用しるら和

粱 周禮和名鈔

名抄引唐韻粟禾子也とうるを阿波ゝゝハくたしから
よしゝ禾子とハ稲粟稷麻乃子とかけていつはりなぬ
てゝよも山東の地ハ稲田ふしといつるゲあらく
ハ粟といゝ米の粟といつるゲあらく
穀の惣稱ゝ穀を忘れ
中之一粟屬也北方直名之曰穀脫殼則為粟米亦曰小米
又直省志書云道化州粟早熟晚熟土人總名曰穀○天工
開物云粱粟種類名號之多視黍稷猶甚其命名或因姓氏
山水或以形似時令總之不可枚舉山東人唯以穀子呼之
併不知粱粟之名也らあ

黄米 天工開物凡粟與粱統名黄米

粱 爾雅註今江東人呼粟為粱故

鄉黨記 秫粟 孟詵本艸大抵粘者為秫不粘者為粟故
るし粟ゝ糯粟ゝ別て秫の名と待ゝを 呼此為秫粟以別秫而配秫粟ゝ即う

蕃名ギイルスト

黄粟 葉 飯穀 粱穀米 以上風京通志

穀 羣芳譜粟米之連殼者本五穀

濱照

黄粱米 別錄○按ずるに考工記に丹秋註に丹秋赤粟也即黄粟なるべし

蕃名

白粟 本艸和名○俗言白粟なり阿波也　猴粟 訓蒙圖彙芒粟なり　吳志奴粟

白粱米 和名鈔引食經に白粱米一名圓米按ずるに爾雅に芑と白苗ハ今之白粱粟と即此もの耳

蕃名

阿波乃與禰 本艸和名　青粟　糯粟

青粱米 本艸和名引陶景注粱米皆是粟の類也

蕃名

保食神の顱上ゆ出て生るとあり高仰の蚕ゆ宜しき成ものなり万葉ゆ子根神の屋まろしなどあり

せば喜田の野生に粟まかはし哉又阿波ちふは昧の淡
きゆゑなるよし書紀に注せるが阿波國安房郡なと
いひしも始は粟てふ言よりいへるを 伊賀風土記ニ阿孟郡始屬伊勢國ニ云阿波
莊天照大神下天之阿波子給五穀長髪蔓故名阿波謂阿孟者音謬也 又粟は大穂の謂なりとも
いふなるや粟にして植ゑる穂房乃大なるを西乃州にて八
島阿波といへり 直省志書ニ山陰縣粟苗如蘆高丈餘粒大如雞豆俗曰遇粟稌粟是島粟の種なり
しるべ一説に房粗く芒長く穂乃長く大なるを粱とし粒
小く房容して堅剛なるものを粟とするよしいへり
式にも粱粟共に阿波とのみぞ訓てなみして八粟を上
て粱とのゝ通名とせる和漢に流ふられたる必しも大小

を別つべきにはあらざるならし 説文ニ粱ハ稲穀名とされし爾雅ニ糜ハ赤粱粟とも
釋されハいはしくハ粱といふわの粟のこまはか
きらざるあんかくはおとまてつゞらに辨なんハかへ
てわづらはしくおもひま
ぐるわざなれハもらしつ○稲麦ハ種子の一粒より數
莖を出て莖毎に一穂を生し黍は一粒より一莖をなし
數枝を出し枝毎に穂を生じ唯粟は一粒に一莖成なし
一穂を抽出なるとされど天生の殊なるある古に亙りて
變らざるをもてとも我彼と素生乃おのづから定あると
とまぶべきおとしや伊勢風土記ニ桑名郡粟畑在市部之
北土民植五穀而難熟但粟而已大熟故名焉○粟に春物
夏物乃兩種あるも秔粟と秫粟の二品にて又莖の色紙黄

赤と穂の大小長短色の黄白青赤黒所々地黒の方言と
因て早晩乃種類と詳して名状百品と及へり○春之の
粟と稗ハ桃花始て開と上時より出し四月と中時より出し五月
と下時より出る早粟ハ六月末七月始と熟く早粟ハ字鏡と
和世阿和と云あり阿和の和ハいみしつ彼と通し用あと東雅にいへり○夏と
の粟と稗ハ初伏と上時より出て土用中迄ハ前くし有用
乃なハう色くと乳と熟ゆる色うすれ○粟と
陸地ハ三四十日前と深く耕し前時と浅く犂と浅し
種子と桶と入て人馬牛乃糞灰油滓の類と壌と揉合糞
と容て前日し前うる上と付足て播種す農業全書と春うる

し八少し踏ぶし夏ハふまとして踏ハ蟻虫種子と穴と引入
されハ蟻虫種子と穴と引入
たゆる所と云ふし故
と二三度と踏す○一法と梅雨の中莢と切と鍬と
二三遍犂と畝し初伏と上時又犂て馬把乃類ふく草
ふとろと掩擺つ生後一人鍬といがんぎ鍬切られハ後
より一人壌みかゝ合せし種子ハ前より○又春夏乃間
原野乃草ハ焼鍬みて粗く削て或ハ土用前と刈草ハと
伐土用と入りて即火と焼焼火する中と雪雪の子と
まぢつ漫撒して土と入れうへ踏じおろと世されとも
孔実あり是ハ人の一法なり蓋粟ハ性日當と喜て高
燥と宜しなと火種して生長なり既と長て穴早と遇と

いつもあしき傷あし周禮訂義云粟耐乾雖歲之旱不
至太失云々○凡粟を蒔ハ一段ゟ種五六合あるべし齊
土ハ多く蒔なり又粟を種ゟハ日午より未時までの交
るべし且と父まさくらゝ沒農の常言ゟ蜘の巣仕て
粟種をとゝハ晩景に及べくるべきゝ大雨乃沒或
ハ雨中に蒔ゝ皆所しく雨後ゟ二三日をし土乾
てよりうるつまて日和と候の種下せし粟ハ三日ゟ
〻馬耳のゝ〻生長なるを苗二三寸の時ちゝて粟
と外ゝ一遍蒔くゝ引ゝ又七八寸ゟ及ふ時一遍皆
引ゝ後所しき苗ハ又一遍皆引ゝ抜て拳の出入ゝ

とゝ苗を洗ひ乾し粟ハ所ゝ種を畦ハ廣く苗稀く引
るゝと皆〻やゝ○糞ハ閑うとも新くはゝきをつゝ
ハ稈腐とゝ虫と節ゝに生し遇穂ゟ成てと実のりあし
肥養ハ地道ゟより好惡所を算ゟハ糠とつゝい上方
ハ鰯とよしとゝるうゝとし凡肥養ゟ人糞のゝ〻
火糞水糞乾鰯油滓稈糠馬牛の屎尿魚骨の骨肉茅草藻
苔の類ゟ多るまて中地の燥濕則粟ゟ適い其土の黑白
莢青或ハ沙石の相まゝ所るゟ地の質とゟの分量あり
老農ゟ咨稟つし○粟ハ熟して遲く刈ゝとゝし又日刈
ゟ干ゝゝいかゝ乾くまゝゟて穂とちぎりとゝゟて藁筵

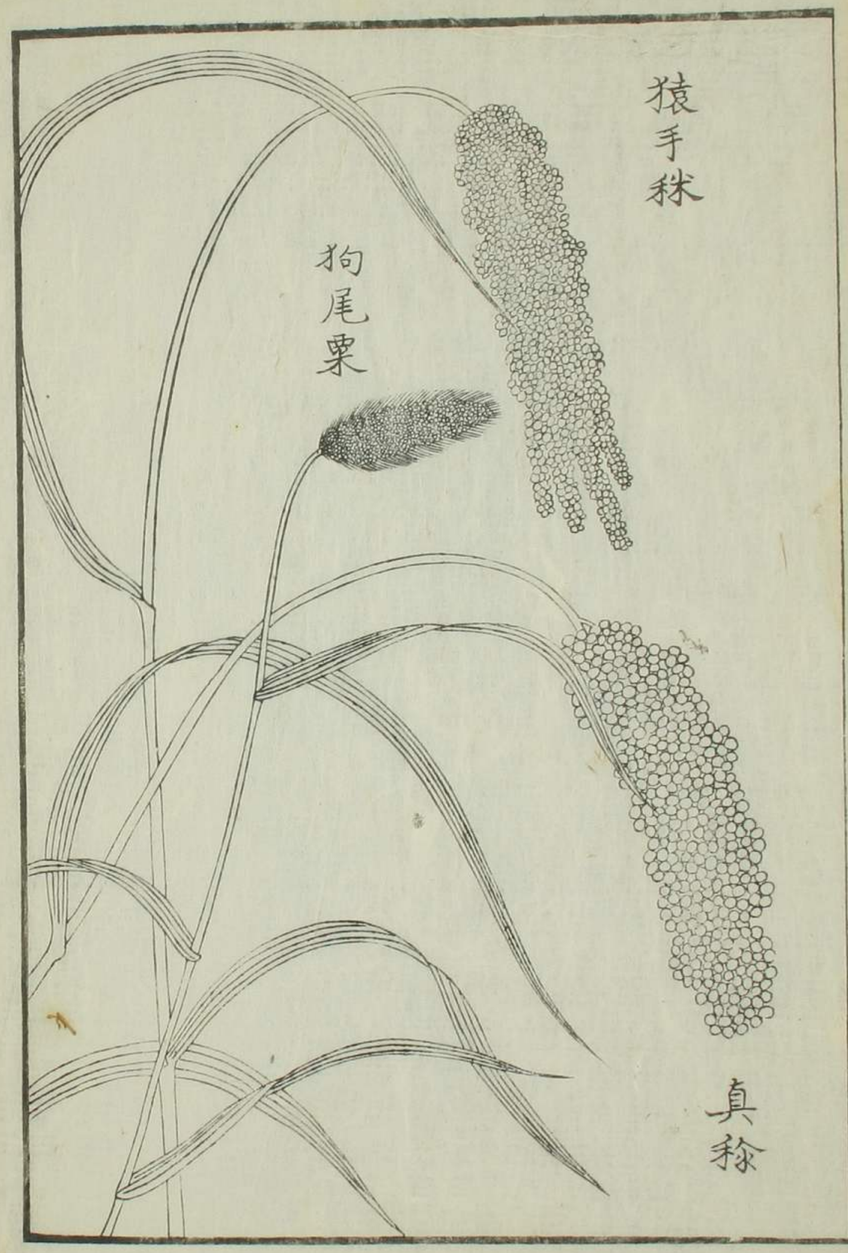
み攤者烈日み暴ふと三四日許し連枷みて打脱そつし或ハ臼ふて舂箕みて簸或ハ篩籠みてふるひし苞とみて儲蓄つし粟ハ稲米と異ひ数十年を歴といつとも虫蝕乃憂ふく飢饉と数ひ軍實と時豆ふるものみし豆稲ハ亞ての嘉穀ふら但生飯ハみてハ他物ともとつ

ゆきは可ちらざる事○公事根源曰京極ふて粟の御飯と献ら蘇民将来の中者とりや此所ハ小将井といふハ稲田姫と祀ふるとそ

糯粟延喜式

秫月令○時珍云謂秫為黍之黏者悞也

衆粘粟以上爾雅　糯秫　糯粟以上



唐本 黄糯 細目 粘穀 小黄米 以上盛京通志

蕃名クークギールスト

糯米と亦其色黄黒赤白等の種類あり其中にて赤

十種乃品あり其色を以て黒糯粟黄糯粟青糯粟など

呼別し但し種穫の法は粱粟を同しく粢餅を作るは糯

米と家ふつとし○粟盛酒は即焼酎なり焼酒火酒など

凡の今の焼酎は南島粟盛を出るを粟かて釀し造り釜

煎まて蒸を氣の烝上り醍醐し酒ろれは粟洩と移ふ

盛の字は俗しるし一説に盛を瓶より瓶に盡を下し入るを盛

と立て墨河ぐるを以名付ともいつあ

此もの吾南島乃精製風土の自然を成て天下無比乃醍

酒せその故ハ南蛮大ひに水田少く粟のミ多く作るり
是を性墾地乃日蔭と為ぶるのみして凡南島の粟ハ蜀
黍のごとく穂乃長二尺程ありて稔るの時ハ正月庶
作ひ雪ゆ種ゆ苅し苗三四寸の頃雨中ゆ振揉盡水ゆ浸
し二三本ずつゆ移ようるもりかゆ大穂の粟ゆて
造るる酒ゆれバ其滴氣ゆまさ稲ゆて醞せるゆ劣ら
ずる芳烈ゆ浮ぞかしゆ後ゆハ稲米ゆてゆ造ゆ節ゆ天工
開物ゆ粘粟可為酒ゆあるゆ焼酎の類ゆあるべし

粟穂新撰字鏡　粟穰同上

穂ゆ八頭蓬蔡猪ゆ長穂ゆるゆの用ゆ十種ゆるゆの形似ゆ
象る凡粟の頭莖ゆ袴ゆ出ぬバ水年ゆハ頭
ゆ垂ゆ宋書云文帝時醴湖生嘉粟一莖九穂　○粟穰ハ田舎の上屋ゆ葺
霜雪の霞ゆ又書紀に少彦名命至淡路而縁粟莖則彈
渡而往常世郷矣ゆ命測ゆる斯身ゆて天下造成の
大功ゆ以て已の力ゆ成ぞ身清淳く念慮ゆ打晴し去
就の道ゆ明ゆ世間の場ゆ帰ゆ此語嗣し所ゆるべし

伎備舊事紀○是黍
稷乃統名ゆ

伎備乃毛知和名鈔○黍ハ黏ゆて用ゆる米の粳ゆ主ゆ
粘黍粘粟統名曰秫○古今注云糯ゆ云天工開物云凡
稲之粘者曰秫黍之粘者為黍　糯黍本朝食鑑　眞黍

黍本艸○說文以大暑而種故謂之黍時珍云稷之黏者為黍禮記

蕃名ソルグサート

穄合穄字典蜀人謂黍曰穄穄

赤黍和名鈔○本朝食鑑曰糯黍者狀與稲黍同而粒大色赤而粘作餅及團子食味美為上膳是赤黍ある

丹黍

赤黍

黄黍以上和名鈔引本艸○盧堪祭法云祠用白黍黄黍

蘪音門爾雅○綱目引詩云維糜維芑糜即蘪音轉也○通雅丹黍謂之糜音門今河西人音糜苗也○綱目吳瑞云浙人呼為紅蓮米江南多白黍間有紅者呼為赤蝦米

赤苗說文蘪赤

蕃名

黑黍和名鈔○本朝食鑑曰有黑黍者是糯黍之黑色者也

秬秠爾雅秬黑黍注詩云維秬維秠釋艸秠亦黑黍又秠一稃二米此亦黑黍但中米黄耳秠稃古今語之異○通雅云本艸又名糜子大雅秬秠糜芑皆黍屬以色別之按之此說穩也○綱目李巡云秬是黑黍中一稃有二米者古之

定律者粒並均勻無大小然ども天工開物云凡黍粒大小總視上地肥磽時令害育宋儒拘定以某方黍定律亦是也

黒黍 和名鈔引本艸○淵鑑類函漢和帝時任城生黒黍或三四實也

蕃名

伎備ハ黄實の義なり和名鈔ハ赤黍黒黍等の名を表て単ニ黍と指ものの名えぶ而赤黒の中ニ糯稷の種あ且蓋黍ハ統名ニして稷麦ニ云ふ大小の別ありかゝ如し今世俗ニ伝ふる本朝食鑑曰黍多種類 本邦所用不過四五種稲黍者所用少而味亦不佳農間作飯粥而食其狀似粟而低小有毛結實成枝而殊散其粒如粟而光滑色黄白三四月下種五六月可收七八月收者亦有其長而短者

名小黍亦稲黍類味不佳又有爪黒黍者此亦稲黍之糯也

舊事紀ニ保食の於胸生黍粟とあるは是なり陸種ふ

ふして皆高燥の地ニ宜しきもの 胸ハいふしへニ高胸坂と称るなり黍粟の高仰ニ今の印本ニハ以粟稗為陸種

冝しきを示さしめしと云

とのことにて黍稗ハ立ニ漏しの又黍ハ書紀と古

事記ニハ生始生よしまるされば穀ハいうニ抑や但黍

ハ粟ニ属しなるし然ニ初ものの五穀乃ち

ものとして禮書ニ食先黍稷而飯稲粱とて祭祀

の祠具ニなしけるとも 皇國ハそもそもむかしとも

しかるなし只稗ばかりむかしより多ゆえて今

乃倭の前中後ハ黍の國と稱へる彼國也ハ遠世稗乃
宜しき所なるよしいつり近古と備前玉人に詢し
たるに玉人て黍とらもけきものゝ如きと答へき○
此ものハ形黍に似て枯る時と白おれし出られど葉ハ
白茅に加ごとく刈ハ硬して黍穰乃如く秣なるまは
色かゝ〻て干なるを稍三尺ばかりなれは根と共夏六月頃
より刈とるに穀より早く熟るゆゑに倭の國人
ハ早晩と稱つるよしいつれも種のまれなるや果敢て稻
のごとし實ハ固く暢やゝに顆粒なるなり 氾勝之書云黍者先夏至
三十日此時有雨強沖縄に赤丸黍とて粒赤くして熟ること
土可種黍畝三升

常乃黍よりふ一月程を早く出来ぬ抜に是なる赤丹黍の
糯に和して○黍ほ米と共て餐餅に作るを熙朝樂事
云正月元旦夙興盥嗽啖黍餻回年々餻家長少畢拜姻友
投箋互拜曰拜年也又酒に燒酎に造て香濃く味醇し
万葉集にいかしへの人ハ好やるきびの酒醒てぐす急
か貫簀酒そむ是黍の酒也一説に吉備の後世伊氣山の
醞名物なて庭訓往来に謂備後酒とあり蓋吉備國ハ黍
に宜きの地昔ハ黍穫て造るの酒醴なるべ
し説文孔子云黍可以為酒爾雅翼云黍字以禾入水三合
之字なり周禮鬯人釀秬為酒書洛誥秬鬯香酒也西土は

稽より黍をもて酒を釀まるなり○下學集　崇德天皇保延二年天雨秬其色黑古今主云宣帝元康四年長安雨黑黍粟○菓用ゐ八黑黍を入るゝと本艸ゐ見えたり

宇流伎備　宇流八粳と稻と同しく粘さるゝ云大和本艸云ふ宇流志伎備と稷とし粘あるき黍と云ふ

稻黍　本朝食鑑　小黍　大和本艸　眞稌　沖縄是糯黍ゐ充ものもの也姑く此ゐ收て異を弘む

稷　本艸○通雅稷又本與粟通尸稷言肅也詩云既齊既稷亦肅意蓋秋氣也穀秋成曰稷百穀皆秋成故粟又為總名又云穄即稷呂覽陽山之穄筆談曰齊晉人謂郎積皆曰穄乃土音也○字波府志云稷穄糜穄一物而四名各因其俗為之名耳正字通稷稷同聲實一字　明楽禮記○左傳注粢者稷也郭云今江東人呼稷為粢○粢又作

蕃名

黍稷つゝゐ者は粱粟を二ゐせぐるがゆゑし天工開物云凡黍與稷同類粱與粟同類と是也又云黍有粘有不粘稷有粳無粘と然ゝと斯方黍は糯とし稷と粳とせるのゐ別ゐ一種の稷てゐ市は三ゐ但沖縄真稌のゆきゐ稽考ふべき再もなくこの稷てゐゆゑは西地乃いみし一特ゐ半みしゐ法を兼て其傳を失ひしるがごとき此放伐變遷乃弊音樂の我ゐ存して彼ゐ亡の類也按ゐ五行大義云稷亦是必非今之黄米而經傳所載稷黍今不可審又爾雅疏云粢也稷也正是一物而似二物故先儒甚疑焉天工開

物云至以稷米為先他穀熟堪供祭祀則當以早熟者為稷
則近之矣通志云稷似蘆而米可食其他也均適の説ふく
して又爾雅翼に粱者黍稷之總名とも爾雅注ふ江東人
呼粟為粱等ふ至てハ吾　邦かしてハ糯粟の一種ちる
ふ迚し夫黍稷連称ちの事ハ尚書左傳の籍にちるし社
稷配享も従来炳焉ふ以五穀之長ちやもちるふ物
今審ふ次第ハ五穀ハ麻黍稷麥豆ハ稲と遺もハ前ふ出やるハ大ハ而も粱
粟ハ漏ふ於て又何の解ちきと最疑ふ堪し是稷ハ
粱粟の一種ちるも未知ちるハ也ふ因ふ四つちる

與ふ稷てふ名の洛まきたれと其ぞと知ちふ端ちはる
ねハ文舟乃楫ちふ云ふ迄ちで日へくふゆきちる沖縄
人ふ言ふしふ彼国まても知ひはるものハ人ちも
はるぞハ深振玖島ふもちはるぞしといふる糯粟はる
里伊信覚島ふ於久はるぞしといふる粳粟ハ者はるちも
おはるぞしハ餅ふ倣て粉稷ちりを以はるちりて粘
氣もはちく或ハ槲葉ふ於ひ裏茅粽ふ煮調て香かくは
しく沙糖ふんと振りはたふ爲んふハ香味も消ちはる
里の爲ちはる又さくはるぞしは穀皮しちぞはるぞ級
ふ炊粥に煮て食はる ふ精粟ちも味もちまて人ちう

似るものとなす云山北里の秀禾あんどもなにし是ま
ハ海ひけるへきあの二種ハその実も　大俵乃粟乃二
粒かけるどのたして絶北濃あと金ちた美ふらと徳
里ゑるさて毛ゆくぶしてふ文字ハいろまやとゆふま
やうて筆うりて共稱と書しりるとは稱の字也ちれ
ぬんとらへハ沖縄まハふるく用ゐ侍りるものとのを
いうつてき共ほか二種乃粟ども吾藩ま殺し上ゆ城
おそれハ実に豪やうに其粒玉太くいろふを吾くふの
とのまハ似氣ゆく弱し迫ぶる稷の事とふ把りひわ
ぶ〻ひしれまま擦言てふかゝ籍に未識偏菊高談稷契と

ゆるまゆうりゆく稱の字ハ黍を左右せしものやうる
と始りひゆうりゝてとゆしりれきれハ真稱てふハ
吾　國の洞まは黍黍のかゝもふ沖縄ふは粟の名を
かく稱ふしはその国ゝそのもの延喜大炊式ま稷を毛
知阿波と訓けくま和名鈔の稷米一名秫とせしふとも
當時ハ支を唐と乗往せしゆりをて支ふ所ふしとい
ふ屋ゝゝと夫后稷の時天嘉穀を埴ほといふもの即稷
ふして又共農の世天粟と兩ほとある粟は古ま在て穀
禾の總称ふしま禮記ま稷を明粢といふる粢ハ餅とふ
ゆ屋きとんてもれハ常の粟ハ髪脆て粢とふを屋ゝ

蜀黍

は故ゑ今順鈔稷を糯黍とするの説みるべし且沖縄の真稌を引て考ばくゝ之ゝ説つるまり

高黍（メカビ）縁ふして長高く植ゝて名くゝ　諸越黍（モロコシキビ）多識編亦唐黍と云

立黍（タチキビ）　穂黍（ホキビ）亦帚黍（ハキビ）そゝ云て穂の帚ゝ如きものゝ名ゝ

蜀黍　齊民要術○博物志云種始自蜀故謂之蜀黍　蜀秫農政全書　蘆穄食物本艸　蘆粟　木稷　荻粱以上廣雅　蘆黍泉州府志　薯黍撫州府志　蘆稷品字箋○綱目時珍云蜀黍莖高丈許狀似蘆荻亦葉似蘆故ゑ蘆荻ゑ比せるの名ある耳

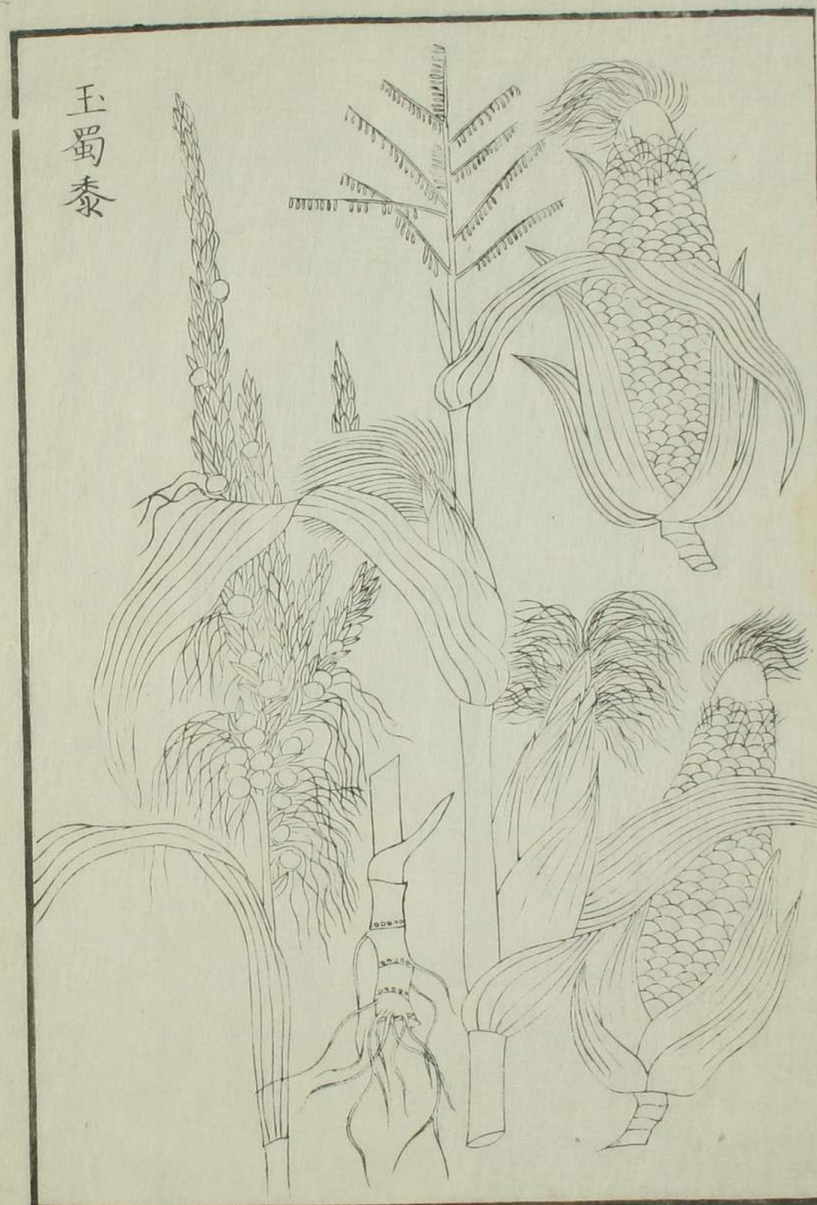
蕃名テユルクスコールニ

此ものゝ晩の二種あり苗高くして瘠地みゝ宜しゝ

暖氣乃肥さるを潤乃家と好む二月苗てより苗五六
寸の時畠乃遍環に移栽る魚し又畠のを紙んと欲け畠
あしらしく実穂よりその時長さ三寸魚しき氣と怕ざ
るがれよ五月雨乃頃漆水の清よべきまてと義やと
く浅実と却て多し八月に熟て殼黒く子赤く粒蝌眼に
似て多密とはり莖ハ藁に似て短く穂ハ帚に似て
体但中土以下に栽へし稀に瘦者あり是ハ
種せ○一種早きものハ微早く殼薄く子ハ黄ふして淺赤
ありて粗大なるもあり熟さを以て農家利とす○凡稙
るに畠稲の種子と如しくまて前て冠し一畝穂

乃熟するを切取実践落し乾く収納し夫より二畝三
番と特抜出るを点かくのごとく収穫夫ゆ魚拾て利
得あり勤て怠る魚し○食ふに実を春て殼をさり餘と
ふ〳〵宜し又磨て粉とし猶水にて数日をさし去る反
るもり餌とし煮て喫い或又酒に造りて黍とまぜくお
ゆし是を名稲粟の補助とし荒飢の積貯に備へ魚し
○粉とふし団て食へハ剤に添てよろし

豆黍 ぜこの子粒大豆の如きは
珠黍 多識 今奥州及北陸乃称中国 本邦俗以形大異常者冠
編 唐諸越本朝食鑑 外國之名而呼之此非某國之産唐黍



玉蜀黍

南蠻黍高麗黍之類是也　薩麻黍是サ諸南氏のまとく其始て中國黍と称やるをもてや本藩よてハ唐黍といふ今蜀黍を呼て唐黍とせるハ誤や蜀黍ハ本おのゝ〳〵斯邦一種の物あらしといつ

玉蜀黍　玉高粱以上綱目　高麗黍　郷麥　御麥　戎菽　番麥以上羣芳譜

包子米盛京通志

蕃名

此もの三種あり或云舶来のものて固蛮産ゑ係もの二月ゑ苗植て七八月ゑ熟ゆ子の色ゑ紫赤と白黄ほ紫赤なるハ黏ほ黄白ハ孫ぞゝを炒折ゝもてゑハ紫赤や佳ゝ（けゝもの苞ゝの頭髮と出し初ハ紅ゑ老てハ赤黑ゝなるゝ初生ゝ嬰児婦女と同て数ふゝ形上已の

縷人ハ肉なきをや焙て食ふ又鍋ニ入煤炒ハ味粒脹析て梅花あるあら又子と炒磨て沙糖ニ和て菓子とあるを或ハ炊き酒媒ニ浸じ〳〵或焼酎ニ造る味甘し苣ニ汁ありて微甜し○肥地に栽たる一根より苞実三五箇ともなる瘠土ハ二三苞出てを一苞のみ登実て候ハ熟らを栽ハ圃の端宅の郭ニ植るつしを土力を拔て膏壤を癖かるものなり○貯るハ苞皮を去りて熟玉へし年を越て換て苞ばかりまゝ水にしてハ折て蝕めり○沙石淋痛ものひゞきハ此根葉を湯ニ煎し頻ニ用れハ驗あらんを○俗ニ此ものの根株ニ高鬚を附て帥ニ

出れハ蕃年特ニ大風吹あへぬるの兆といふ

成形圖說卷之十九終